

論文

進行する英語化と学問する言語としての  
ニッポン語の生き残り戦略

—漢字が作ったニッポン文化の強みを生かしつつ—

岸本 建夫

- I. analogとdigital—情報伝達の2つの方式
- II. 情報化時代は、表音文字= digitalが優勢
- III. 他言語を圧倒する英語
- IV. ニッポンの今後の言語状況の予測
- V. ニッポンの科学技術の競争力

- VI. ニッポンの競争力の在り処—analog文化の再認識
- VII. 漢字とかな、そしてローマ字を背景としたニッポン文化
- VIII. ニッポン文化の維持・発信と漢字の総ruby化

I. analogとdigital—情報伝達の2つの方式

言語はヒト同士の相互の最も有力な情報伝達の手段であるが、まず情報伝達の手段としての文字、そして漢字の機能上の特性について、根本的な所から考察することを始めたい。情報伝達の手法として、digitalとanalogの2つがある。

1. digitalであるが、これは相互に取り決めた記号=暗号(数)で、情報を伝える方式である。数学でいえば代数。言語でいうと、表音文字。この方法の特色は、記号の意味を共有する前提で、多数の記号を送れば、相手は精確に与えられた情報を再現する。ただ、記号によって一旦抽象化された意味を再度具体化しなければならないので、それだけやっかいな面がある。

たとえば、4角形の情報を、X軸とY軸の座標上の点、(2, 2) (2, -2) (-2, -2) (-2, 2)と送れば、相手も間違いなく、完全に同一の4角形を再現できる。線の太さも示せば、さらに正確に再現できる〔ところが、実は(0, 3)と(0, -3)に点がある6角形であるのに、この2点の情報を伝えてなければ、上の4角形と認識されてしまう。だから、できる限り多くの点情報を伝えた方が、精確になる。〕

2. analogは図形(波形)をそのまま送るもの。数学

でいえば幾何。言語で言うと表意(象形)文字。図形で送れば、相手はdigital方式のように抽象化→具象化という面倒くさい操作をしなくとも、すぐ意味を理解できる。しかし、情報作成に時間と労力が必要となる。また、もし、(2.02、2.06)というように、細かくなった場合、その図形を精確に書いて送付すること自体、難しい。また、線の太さを一定に保って書くことも難しい。どうしても歪みが出る。この点で不精確となる。

以上のように、それぞれ一長一短がある。digitalは情報量を増やせば増やすほど、精確に情報は再現できるが、無限に増やすことはできない。最後のところで現実に比較し情報欠落がおきる。だから、完成品が人工的・無機質で血の通わない冷たいものになる。analogは再現は難しいが、そのまま見て聞いて、繊細な変化を感じることができる。だから、温かみを感じる。

漢字はanalogの情報伝達手段である。言語表現としては、象形(表意)文字のほうが、絵であるから一字で意味を表現し、理解しやすいという面では優れている。しかし、簡単な概念の伝達には便利だが(山、川など)、複雑な概念を表そうとすると、極めて複雑になり、覚えること自体が困難になる(憂鬱など)。このように表記に時間がかかり、学習に手間取り、多くの時間とenergyが必要なので、社会がspeedを求めるようになればなるほど、不適応となる。

## II. 情報化時代は、表音文字＝digitalが優勢

ほとんどの先進文明地域は、かつては象形文字であったが、表音文字に転化した。ニッポンはかなという表音文字をもっていたから、近代化に成功したが、欧米の先端科学・技術水準に完全には追いつけない。IT化では完全に遅れをとっている。チングオ（中国）などは絶望的（まだ、律令制・農奴制国家）。

マイクロソフトが世界市場を完全独占した（今、揺るぎ始めているかもしれないが）。ビル・ゲイツの資産は先進国ニュージーランドの半分はある。トヨタは自動車の世界一になったかもしれないが、独占状況からはほど遠い。

しかし、ニッポンは曲がりなりにも近代化に成功したため、なかなか漢字廃止の動きにはならない。漢字文化圏の外縁地域であるチョソン（朝鮮）、ベトナム、タイなどでは漢字放棄。ニッポンはよほど、欧米に水をあけられ、彼らの言語に席捲されるような危機的状況にならないと、ニッポン語の容易化の流れにはならない。

## III. 他言語を圧倒する英語

現在の状況からいえば、英語がde factoの世界共通語にますますなる。EUの共通語も英語。研究論文では、自国語より英語で書くことが選好されている。途上国では、重要使用言語（教育・学問から経済・政治）が母語ではなく、英語にすでになっているか、なりつつある。ニッポンも英語を共通語として使用しつつ、自国言語を残すということしかない。

ニッポンにおいても、ソニー、ニッサン（社長は外国人）をはじめとした企業、大学（外国の研究者や学生との日常的な接触の開始）などにおいては、すでに共通語化しつつある。

EUの言語はそれぞれがもともと方言のようなものだから、英語を共通語としても、学校教育の負担にならないし、母語も科学を載せられる言語として教育されていくならば、残っていくだろう。ニッポン語の場合はそういうわけにはいかない。このままの使い方では維持できない。

## IV. ニッポンの今後の言語状況の予測

### ・EUの状況

EUでは、言語それぞれが親戚みたいなものであるから、習得がさほど困難でないため、ニッポンより、ずっと広範にかつ容易に英語が習得される。ドイツでは、小学校3年生、州によっては1年生から英語教育が開始されている。本屋では、英語とドイツ語の本が同じ本棚に混ぜて置いてある。大学では、英語ができることが当たり前だから、英語教育はない。学問領域でも、次第に英語が優勢となる。しかし、ドイツ語も学校教育でしっかり教えられ続けなければ生き残れるだろう。

### ・ニッポンの“elite層”の英語化と多様な習得level

ニッポンは国内市場が大きいので、国内だけを相手に仕事をしている人が多く、彼らにとっては外国語は必須ではない。だから、いくら学校で英語教育をしても一部の将来英語が必要とされる仕事に就こうと思う者以外は日常会話すら覚ええない。外国語は、それを必要とする一部（少数ではないが）の人々が習得。しかし、国内においても外国人との接触は増えるから、それぞれのlevelにおけるある程度の習得が国民の広い範囲においてなされていくだろう。

ニッポンでは格差社会の頂点を目指す上向き志向の高い親の子供を入学させた一部のelite小学校や特区の学校が英語教育に力を入れはじめた。その他の一般の子供との格差は開こう。大学においても、英語に力を入れる学部（大学）とそうでない学部（大学）とに分かれ、就職先にも違いが出るから前者に偏差値の高い学生が集中する。

elite予備軍は、主には英語で教育を受け、英語で表現する。外国人とのcommunicationには当然、英語を使う。（もちろん、ニッポンの国内市場は大きいから、英語ができなくとも高い所得をえる領域は多い。）ニッポン語はニッポン国内においても学問や大企業の経営陣では、次第に第2次言語となるだろう。

## V. ニッポンの科学技術の競争力

elite小・中学校は、漢字教育にも力を入れるだろうから、energyはやはり、そちらにもかなりとられてしまうことになり、欧米ほどには、最先端科学技術を担

人間を大量には育成できないだろう。ニッポンが科学技術の面で世界の最先端に立つ日は来ないだろう。常に良く二番手であろう。ニッポンの技術水準は、総じて言えば、中位levelであり、ITや宇宙・航空・生命科学などの先端levelでは遅れをとっている。

先端levelに立つには、漢字習得を容易にすることで、ニッポン語をやさしくして、ニッポン語と英語の間を自由に行き来できる人間を大量に（一部eliteではなく）、創出することが必要だ。しかし、明治以来の成功体験は漢字“廃止”に踏み切らせないだろう。

## VI. ニッポンの競争力の在り処 — analog文化の再認識

ニッポンが先端技術の開発で総体的にtopを走ることではないだろう。それでは、どこにニッポンの優位性があるのだろうか？二番手という選択肢もあるのではないか。他人が発明したものの改善がその得意技だ。世界は先端科学技術だけでなりたっているわけではない。中位的技術（自動車、鉄道など）、低位的技術（繊維、手工業など）の領域でもすぐれたものは歓迎される。

中位的技術領域の製造過程では、一部あるいは、かなりの程度にdigital的技法を利用しつつも、最終的には、温かみのあるanalog的製品・サービスを提供することによって人々の需要に応えることができるのかもしれない。digital時計も便利だが、analog時計が廃れないように。

ニッポン人はモノ作りを得意とするといわれているが、機械では製作できない、精密機械部品の微細な研磨などの職人的な勘と熟練による技術は、先端技術とはむしろ相反するものだが、先端製品の製造には欠かせないという奇妙で面白いparadoxがある。

となれば、ニッポン人は精密で、その意味では高度だが、先端的ではない中位的なanalog的技術領域ないしは、文化・芸術領域でこそ強みを発揮できるかもしれない。漫画や歌謡、伝統的な陶磁器、漆器や、食文化のような領域でこそ、優勝すべきなのかもしれない。

## VII. 漢字とかな、そしてローマ字を 背景としたニッポン文化

こういったanalog的感性をニッポン人はどのように

して育んできたのだろうか？わたしの答えはこうである；それは漢字を習得し、それをさらにシナ語と体系が異なるニッポン語に「無理して」適応させなければならぬ過程で、磨かれてきたのではないだろうか。漢字もそうだが、それだけでなく、それをかなに発展させる過程でさらにanalog感性が洗練された。

漢字は、絵であり、線であるが、かなによって細い線による曲線、微妙さ、繊細さを学び、身につけた。そして、また、漢字そのものから来るものだが、象徴性である。このmixされた感覚といえようか。

狩野永徳の唐獅子図、長谷川等伯の松林図など、単なる写生ではなく象徴化にすぐれる。西欧画の本流は精緻さを追及し、それを前提にしての目の錯覚を利用する手法である（ダビンチなど）。さらに、ニホン画の線による表現の巧みさである（西洋の絵画やcomicは面としてとらえる）。

浮世絵にみるgraphic design（幾何学）的表現。浮世絵ほど近代以前に創出され、design的感性に優れる絵画（版画）芸術はないだろう。

こういった繊細なanalog感覚が、ニッポンが置かれた四季のある豊かな土壌と軟水、海産物にも恵まれた環境の中で（現在は輸入が多いが、またそれが可能であることによって）、今まさにあらためて爛熟をはじめている。桃山や江戸時代にも富者の中にはこういった文化状況は存在したが、今は大衆的levelで享受できる。

ニッポン食やその要素を取り入れた洋食が、外国人に評価されている。もともと素材に余計な手をくわえないで生かす文化が、輸送や保存（冷凍・冷蔵）の技術の発展とあいまって、大きく発展してきたといえる。

それが、単なる量ではなく、生活の質の高度化を求め潮流の中で、ニッポン文化の良さとして世界的にも認識され始めてきたのではないか。Powerとdynamicがもちこんだのも同じことのように思える。

文字に近い領域に話を戻せば、絵による情報伝達が見直されてもいる。ニッポンの漫画、animationが、世界的な流行となっている。通常の映画は実際にあるように描くこと＝活動写真であるが、animationは現実の誇張、顔も目がやたらに大きかったり、体も現実からはかけ離れて、styleがよかったりすることによって自由な、飛躍した表現ができる。しかも、ニッポンの

animation は、画面数が少なく連続しない不自然で粗雑な動きではなく、流れは smooth で、人の微妙な感情の表現までも描こうとしているから、単なる写真表現を超えたものを表現している。ここに世界で広く受け入れられる要因があるのだろう。

これこそ、漢字・かな、近代ではそれにローマ字が加わることによる文字文化が背景にあって生まれてきた。ニッポン文化におけるローマ字は通常の情報伝達手段というより、impact づけ、ないしは design つまり絵としてであるが、表現方法を豊かにしたことは間違いない。

## VIII. ニッポン文化の維持・発信と漢字の総 ruby 化

こういった状況を踏まえて、では、ニッポン語をどうしていったらよいのだろうか？ 漢字・かな・ローマ字混交文化がニッポン文化を豊かにしている側面があること、そして、それが科学技術面では、決して先端的ではないが、それはそれで世界の中で一定の競争力を維持させているし、より広い文化面では、より繊細な味わいを呈示するということで世界に発信されつつあるということである。だから、この文化形態を一概に否定するのは間違いだということになる。

しかし、いずれにしても IT 時代に入り、今のままでは、やはり先端科学・技術の分野では欧米に水を空けられていくだろう。そのためには、漢字への愛着を抑制し、漢字学習の負担を減らすことが肝要だ。

すぐにでも始められることはある。漢字の“書き”の test はやめる、書くことを強要しない。読みはやる。むしろ、読みは増やしてもよい。“綺麗”と表現してもよいではないか。そのかわり、使った漢字には、ruby をふる。そうすれば、外国人のニッポン語学習は断然容易になり、学習者数は飛躍的に伸びる。これは、外国人だけでなく、ニッポンの子供にも便利である。白川静さんも、ruby のおかげで、難しい本をどんどん読めたといっている<sup>1)</sup>。空いた時間を科学技術と外国語の時間にあてる。

ニッポン語をやさしくする方策として、総ローマ字化は可能だろうか。ニッポン語には、総ローマ字化は、やはりなじまない。母音のみ、あるいは子音と母音の組み合わせで最後は母音で終わるニッポン語の単語はローマ

字だと同一文字を重ねて使うことになり、情報の質が劣る(例えば：やま→yama で a を 2 度使う)。なるべくかなを使い、使った漢字には ruby をふるというのが、最も簡単で効果がある。

今の世界情勢では、英語を生活のあらゆる領域で主要言語として使用するようにならざるをえなくなっていく。そういった情勢で、いかにしたらニッポン語を残すことができるのかというのが課題だ。それには、ニッポン語の特徴をなるべく残しながら やさしくするしかない。

私の考えは、漢字は無理して使わない、というものだ。ある漢字を書けねばかなで書けばよい。読みやすい分かち書きをすれば、総かなでもよい。しかし、これには抵抗が大きい。総ローマ字化と同じく、明治からの成功体験によって作られたニッポン人の identity・nationalism が、総かなを許さない。漢字・かな混じり文が、ニッポン人の強固な identity となっているからだ。だから、漢字使用制限は強制ではない。なるべく使わないようにしようというものである。

英語も、漢字(特に“書き”)も両方自由に操ることはできないことではない。しかし、両立に energy を注げば、その分その他の分野の能力が向上が手薄になる。だから、他の分野にも時間と energy をさけば、次第に漢字を“書く”能力をつけることはできなくなっていくだろう。漢字の“書き”の学習をおしつけければ、ニッポン語の敬遠=ニッポン語離れがおき、ニッポン語は完全に第 2 次言語の地位に貶められるだろう。

ruby 化は漢字否定ではないから、私のような漢字廃止(特に“書き”)論者と維持論者の同床異夢を可能とする。いずれにしても英語の必要性が高まり、ニッポン語と並行して勉強しているうちに、漢字の“書き”の学習負担が過大であることが、ますます認識され、かな表記が次第に広がるだろう。総 ruby 化と漢字の“書き”の非強制化によって漢字と繊細で味わいのあるニッポン語の特徴を維持させつつ、やさしくできる。

私は、自分の著作はすべて総 ruby としている<sup>2)</sup>。海外からの留学生には評判がよい。ニッポン人の中・高校生にも便利なものとなろう。そうすれば、彼らはニッポン語の本も充分読め、外国語の本にも親しくなっていくだろう。

<sup>1)</sup> 本論稿は総 ruby にしたが、現在の word processor

soft はかなを漢字転換してから、再度かなでrubyをふらねばならないので、しごく面倒である。漢字転換と同時にrubyをふるsoft作成はむずかしくはないはずだ。soft製作者には、そういった改善を期待したい。

注

1) 白川 静 「私の履歴書」(元載：日本経済新聞 1999年12月、「回思九十年」平凡社 2000年、日経ビジネス版 2007年)

私は、不明にも最近まで、あの漢字研究の第一人者である白川 静先生が、漢字廃止の主張に、強い共感を持たれていた、ということを知らなかった(最終的には学習負担の回避には漢字の制限が妥当だと言っておられるが)。また、rubyに助けられたともいっている(以下、下線はキシモトによる)。

漢字が非常に難しいわけですね。そのため、どうも文化の自由な進展が阻害されておるといのは、極めて基本的な考え方で、誰もがそう思っておられるだろうと思います。魯迅も、漢字が大変張っているが、我々の祖先は漢字より先に生まれたのだ、だから我々のために漢字を犠牲にするか、漢字のために我々を犠牲にするかと問われるならば、我々は漢字を犠牲にしなければならないと、こう言っている。魯迅は、ローマ字化を考えておったのではないかと思うんですね。はっきりそう言っている文章もありますんですよ。だから、漢字を少なくしたい。漢字が非常に負担になっているというわが国だけでなく、中国でも、魯迅のような非常に先見的なひとが、大変心配しておられたことなのですね。

したがって、日本の現在の国字政策が基本的に誤っているとは考えておらないのです。殊に戦後、占領されておって、その中でローマナイズするか、仮名にするか、少々の漢字にするかという選択を迫られた場合に、第三の選択肢を採る以外に、方法はなかったと僕は思う。ただ、それを強制的な、義務的なものとして行いますと、もう引き返せ

なくなるのです。だから、もう少し余裕のある方法を探った方がよかったのではないかと。また、学校で扱う場合と社会生活とは違うから、すべての出版物を規制するようなことは避けるべきであったのではないかと。(p.299)

実際は中国の方が我々よりも、文字の問題については課題が多いはずなのです。平仮名も片仮名も持っておりませんが、ローマ字もあまり用いませので、幼稚園の園児でも字画の多い漢字を使わなりません。彼らが当面している文字の問題は、我々よりはるかに深刻だと思ふのです。魯迅が漢字をやめてしまえと言うのも、もっともです。

ただ、識別能力からいうと漢字の方が、形を見て、ほとんど直感的に把握できますから、片仮名や平仮名ばかり、あるいはローマナイズされたものより優れています。むしろ、まず、漢字を理解した上で不必要なものを淘汰する。将来の言語文化のあり方というようにものに対応させながら、次第に洗練していくというふうになれば、よろしいのではないかと思います。(p.314)

(質問者) 当時の立川文庫は子どもには難しかったのではありませんか。

白川：当時はルビつきが普通でした。ルビがあれば、かなりむづかしいものでも、それなりに読み、それなりに理解することができます。小学校を出る頃には、今の常用漢字表か、あるいはもっと多くの字を知っていました。(p.97)

2)

キシモトの著作；

「日本語の秘密」、「日本経済の秘密」(ヤック企画) この2冊は、日本語・英語対照 「市民的国民国家の形成と宗教政策」2005年(晃洋書房)、 「中国社会主义体制の危機と軍事覇権」2007年(晃洋書房)

その他；

私の著作以外にも、大学生向けのrubyつきの書物が現れた(おもに留学生を対象としている)；初瀬龍平他 「日本で学ぶ国際関係論」2007年(法律文化社)